

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 31 日現在

機関番号：37116

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520603

研究課題名(和文)主観化、間主観化に関する理論的、記述的研究

研究課題名(英文)A Theoretical and Descriptive Study on Subjectification and Intersubjectification

研究代表者

大橋 浩(OHASHI, Hiroshi)

産業医科大学・医学部・准教授

研究者番号：40169040

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円、(間接経費) 330,000円

研究成果の概要(和文)：Elizabeth Closs Traugottらの提唱する、非主観的 >主観的 > 間主観的という意味変化仮説を検証し、これに關与する要因を考察した。英語の強意副詞(all you want や big timeなど)や構文(having said that)などを対象に、コーパスからの用例を分析した。

その結果、意味化を「(間)主観化」の認定基準とすべきであり、事例研究から一方向性仮説が裏付けられ、主観的意味が命題内容と、間主観的用法が対人関係や談話管理機能と結びついていることが主観的意味 > 間主観的意味という発達の順序の動機付けであることがあきらかになった。

研究成果の概要(英文)：This research investigated the validity of the theory of semantic change proposed by Traugott and her colleagues, who maintained that meaning changes from non-/less subjective to subjective to intersubjective. It also examined factors involved in the development of subjective and intersubjective meaning. Synchronic as well as diachronic analysis was conducted on English intensifier phrases, such as "all you want" and "big time" and constructions, such as "having said that." Examples were collected from COCA and COHA.

Consequently, this research found that (inter)subjective meaning had to be defined in terms of "semanticization" and attested Traugott's theory of unidirectionality of semantic change. The development from subjective into intersubjective meaning was found to be motivated by the fact that subjective meaning is associated with propositional content while intersubjective meaning is oriented toward interpersonal relationship and discourse management.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：主観化 間主観化 主観性 間主観性 文法化 構文化 強意副詞 コーパス

1. 研究開始当初の背景

近年、推移・誘導推論などの語用論的概念や、メタファー、メトニミー、構文、主体化などの認知的概念を通時的現象に援用することにより多くの新たな知見がもたらされてきた。なかんずく、Traugott とその共同研究者による「意味変化の一方向性の仮説」は、記述、理論の両面で多くの研究者の関心を集めてきた。この仮説の特に注目すべき点は、主観性を基準においた、non-/less subjective > subjective > intersubjective (Traugott (2003), (2010)など) という意味変化のプロセスが提案されている点にある。

しかし、この仮説には、主観化が間主観化に先立つ必然的な理由や動機付けが不明であるという問題点がある。Traugott は意味変化の基盤を話し手と聞き手による会話の場に置くが、話し手は必然的に聞き手の心的状態—主観性—に注目するので、それを言語化した間主観的な表現を用いることは、主観的な表現を用いるのと同様に自然なことだからである。

2. 研究の目的

1. で述べた問題点を解決するために次のことを明らかにすることを目的とした。

- (1) まず、主観化、間主観化、という概念を検討する。subjectification, intersubjectification という概念は研究者によってとらえ方の違いが散見される。本研究でどのようにとらえるか、概念規定を行う。
- (2) その概念規定に基づき、データを、主観化、間主観化という観点から分析する。
- (3) 分析したデータに基づき、主観化、間主観化が生じる通時的順序について、その動機付けを考察する。

3. 研究の方法

(間)主観性、(間)主観化、意味変化、文法化などに関する文献を読み、学会発表を聞いてデータを収集し知見を蓄積する。

独自のデータとしては、all you want や big time などの英語の強意副詞や having said that などの構文を対象とした。これは予備的な調査で、これらの表現が、利用可能な通時的コーパスでその変化をたどることができる程度の比較的短い期間で意味変化を起していることがわかったからである。

データの収集には電子コーパスを利用した。The Corpus of Contemporary American English(COCA)からの収集例で各表現や構文の現在の用法を特定し、The Corpus of Historical American English(COHA)からの収集例で、過去 200 年あまりの意味・用法の変化を調査した。これらのコーパスはインターネット上で無料で利用できるようになったため当初予定した有料のコーパスを購入する

必要はなくなった。

収集したデータに基づき、調査した語句や構文の意味・用法を、主観性、間主観性という観点から分析し、意味変化の過程を明らかにした。その際、新たな意味や用法が生じる際の理由や動機付けを詳細に考察した。

考察がまとまった段階で国内、国外の学会で成果を発表し、フィードバックを得て論文として刊行した。また、研究成果の一部を、認知言語学のテキストの一章(文文化)として執筆し刊行した。

4. 研究成果

(1)主観化、間主観化の概念規定に関しては、言語表現が特定の文脈で持つ語用論的な含意は意味として定着したものと認定せず、十分に意味化した段階で初めて新たな意味と見なすと結論づけた。

この定義は基本的に Traugott(2010 など)の定義と軌を一にするものであるが、こう規定すると、真に間主観的な表現は日本語の敬意表現のごく限られてしまう。しかし、これが一般的な意味の認定方法であり、含意と意味との区別—それが段階的なものであり、截然と区別することが困難であるとして—を放棄することは意味記述の面で適切ではない。

本研究での分析例をあげると、all you want という句が、本来の「のぞむことすべて」という指示名詞句としての客観的意味から、You can eat all you want.におけるように、名詞句読みと「すきなだけ」という副詞句読みとの間で曖昧な例を橋渡しとして、“But you can go out into the basin all you want.”のような強意副詞としての主観的意味を獲得した後、“Disbelieve me all you want, but I know what I saw...”のような譲歩的文脈で用いられるようになる通時的プロセスが明らかになった。「譲歩」という心的プロセスで話し手は、相手の言うことを一旦受け入れ(たふりをし)た上で、それと反対の主張をして相手に考えを変えさせようとする。ここには、相手の心的状態に注目していることを言語化するという意味で「間主観的」な面が含まれる。しかし、「間主観性」は all you want 自身の意味ではなく、それを含む構文全体で表す意味であるので、all you want 句が「間主観化」しているとはいえない。

この例でもわかるように、言語の意味やその変化を正確に記述する上では、意味の定着 = 意味化を認定基準とすることが必要である。

(2)分析した例はいずれも客観的意味 > 主観的意味 > 間主観的用法という発達順序を示し、Traugott の意味変化の一方向性仮説を裏付けるものであった。

big time は本来の「すばらしい時間」という指示名詞句としての客観的意味からメトニミー的变化により「一流の人」という

意味を持つようになり、名詞の限定用法から「一流の」という形容詞に品詞転換する。その後、形容詞が“big time party poopers”や“big time spenders”に見られるようにその意味を漂白化、抽象化し、強意的意味を定着させる(主観化)。さらに、“This is going to cost you big time.”や“I was screwed big time.”のように、事態の程度の極端さを表す強意副詞用法が発達する。

having said that は分詞構文由来の表現であり、本来、時、付帯状況などの客観的意味や理由などの主観的意味にも用いられる表現であったが、現在では「とはいえ」という譲歩の意味に特化した構文となっている。譲歩に間主観性が含まれるのは先に述べたとおりであるが、興味深いのは、「自分の発言に反する内容を述べる」ことを合図する構文的意味から、その意味が希薄化し、トピックシフトという談話管理的機能を果たしているように見える例が散見されることである。

(3)客観的意味 > 主観的意味 > 間主観的用法という発達順序の動機付けに関しては、分析例を見る限り、当該表現が文や構文で果たす役割と大きな関係があると思われる。all you want も big time も主観的な強意副詞としての意味は、まず命題内容を修飾するという機能にある。一方 all you want が間主観的構文で用いられる場合、その意味は相手に対する反感の表明という主観的意味に加え、相手の考えや態度を放棄させるといった対人関係的な側面を含む。また、having said that に感じられる間主観性は談話を管理して相手の注意をコントロールするという機能と結びついている。このように当該表現が関与する要素は、命題内容 > 対人関係・談話という変化を見せるが、これは主観 > 間主観という変化に対応している。客観的意味が命題内容の一部を構成していることを考えると、具体的意味が希薄になる程度と対応していることになり、主観的 > 間主観的という発達順序は、一般的な意味変化の傾向と並行的なものであるととらえることができる。

(4)以上、当初解決されるべきと考えていた課題に対しては解答を与えることができた。さらに、本研究を進める過程で今後の興味深い研究課題として次の2点がうきぼりになった。

(i)構文化。all you want の分析をすすめる際、現在の主な意味である譲歩用法を的確に記述するためには、all you want を含む文に加え、(しばしば but に導かれる)後続文までを含めた、schematic なレベルまでを分析の単位とする必要がある。all you want が現在ほぼ譲歩の意味と結びついているという事実は、all you want を含む文の使用頻度の増加によるものであるが、この事実は、all you want が使われる環境を schematic な「構文」としてとらえることにより的確に説明でき

る。したがって、従来の、厳密な形式と意味のペアとしての構文に加え、相関表現的な「ゆるい」構文を認め、その通時的発達過程である構文化という観点からの言語記述が有効である。

(ii)意味変化における言語使用者の役割。意味変化においては Traugott が主張するような、会話的含意を意味化することによって意味変化が生じるというプロセス以外に、話し手が新奇な表現に接した場合に、それが標準的な用法でないことを知りつつ、それを用いるという面があり、これが意味変化に影響を及ぼすことは明らかである。この視点は実証が困難ではあるが、何らかの方法で意味変化の理論に組み込んでいく必要があると思われる。

以上の2点は今後の研究によって明らかにしていく予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

大橋 浩、単著、Zeki Hamawand著、*The Semantics of English Negative Prefixes*, London: Equinox, 2009, xii+179pp.の書評(英文)、*Studies in English Literature, English Number* 53, 査読有、2012、221-227

大橋 浩、単著、強調詞の発達と(間)主観性、日本英文学会第83回大会 Proceedings、査読有、2011、141-143

[学会発表](計3件)

大橋 浩、単独、Grammaticalization and Subjectification in English Intensifiers、2013年6月28日、第12回国際認知言語学会議、カナダ、アルバータ大学

大橋 浩、単独、強調詞の発達と(間)主観性、2011年5月22日、日本英文学会第83回大会 SYMPOSIA 『認知的視点から見た言語変化と共時的多義』にて、北九州市立大学

大橋 浩、単独、Concessivity and Intersubjectification: The Case of an English Intensifier Phrase、2011年7月15日、第11回国際認知言語学会議、中国、西安外国語大学

〔図書〕(計6件)

大橋 浩、単著、第7章「文法化」、認知言語学 基礎から最前線へ、くろしお出版、2013、査読有、155-179

大橋 浩、単著、Having said that をめぐる覚え書き、言語学からの眺望 2013、査読有、九州大学出版会、2013、12-27

大橋 浩、田中公介、西岡宣明、宗正佳啓と共編、言語学からの眺望 2013、九州大学出版会、2013

大橋 浩、単著、「だいたい」における多義の関係、言語と文化の対話、花書院、2012、査読有、13-29

大橋 浩、単著、強意副詞 big time の発達、ことばとところの探求、開拓社、2012、査読有、391-404

大橋 浩、久保智之、西岡宣明、宗正佳啓、村尾治彦と共編、ことばとところの探求、開拓社、2012

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

<http://hyoka.ofc.kyushu-u.ac.jp/search/details/K005333>

6. 研究組織

(1)研究代表者

大橋 浩(OHASHI, Hiroshi)
産業医科大学・医学部・准教授
研究者番号：40169040

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし